

4. 歴史学と歴史教育の歴史(3) — 「歴史総合」・「日本史探究」の構成とねらい

2025.10.24. 大橋 幸泰

はじめに

戦後における歴史学と歴史教育の歴史

a. 歴史学と歴史教育との接近／歴史学の成果を反映させる歴史教育への志向

b. 歴史学と歴史教育との分断／教科書検定・学習指導要領による国家主導の歴史観への誘導

→両者のせめぎ合いのなかで、教科書裁判を通じて教科書のあり方をめぐる議論が展開

*この過程で、教科書を絶対視しない認識の拡大／一方で知識偏重傾向と大学入試への対応という矛盾

→これらの問題を前提に、2010年代の教育改革へ

*本日は歴史系科目の再編の経緯とともに、「歴史総合」・「日本史探究」の構成とねらいを考える

1. 「歴史総合」・「日本史探究」・「世界史探究」登場の経緯

1989 年告示の学習指導要領／高校社会科を地理歴史科と公民科に分割／歴史系科目の再編

*「日本史 A」(2 単位)・「世界史 A」(2 単位)・「日本史 B」(4 単位)・「世界史 B」(4 単位)

→このうち、「世界史」2 単位分を必修

2006 年 高校で歴史学習についての問題が表面化

2011 年 日本学術会議が「歴史基礎」の新設と歴史系科目の再編を提言

2014 年 日本学術会議が「歴史基礎」を基軸とした歴史系科目再編の方向性を具体的に提言

2016 年 中央教育審議会が「歴史総合」新設を答申

2018 年 学習指導要領改訂／「歴史総合」(2 単位必修)・「日本史探究」(3 単位)・「世界史探究」(3 単位)

→ 2022 年入学者より実施

*以下、学習指導要領の規定／ラージアルファベットが大項目、丸数字が中項目／ここでは、小項目は省略

2. 「歴史総合」の構成

(1) 学習指導要領が提示する「歴史総合」と教科書の実際(第一学習社版)

A 歴史の扉

①歴史と私たち／「私たちに関わる諸事象が、日本や日本周辺の地域及び世界の歴史とつながっていることを理解する」

*時間規律が求められる近代 pp.24-25 /ヨーロッパでは 16C 以降、日本では 19C 後以降／「遅刻」の誕生

②歴史の特質と資料／「資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解する」

*日露戦争の叙述 pp.26-27 / pp.98 の叙述はどのような資料に基づいて叙述されているか／資料を読む際の注意点を促す(資料批判)／日本政府の立場、マスメディア(イギリス)の立場、政治家(日本・ロシア)の立場

→探究活動の方法 pp.28-31 / 「歴史的な見方・考え方」3 つの方法／時系列的経緯、空間的比較、現代とのつながり／「日本史探究」では、「歴史資料と歴史学」「歴史学習の基礎」の頁 pp.6-9 において、日本史に即して解説

B 近代化と私たち

①近代化への問い／18-19C、近代化の総論 pp.32-33

*近代化による GDP の変化、人口増加と人々の移動、政治意識や学びの変化

→いびつな世界の形成から帝国主義の登場へ/人権意識の目覚め一方で、一律化・規律化の進展

以下、本文/②結び付く世界と日本の開国/③国民国家と明治維新/④近代化と現代的な諸課題

C 国際秩序の変化や大衆化と私たち

①国際秩序の変化や大衆化への問い/ 19C 末-20C 前、国際秩序の変化と大衆化の総論 pp.116-117

*二度の世界大戦、アメリカ・ロシア(ソ連)の台頭、植民地の独立、大衆社会の到来

→世界の緊密化とともに世界中を巻き込む戦争の発生/米ロ(ソ)を中核とする世界秩序/そのもとで、従来、被支配者の側にいた人々の自立進展・権利拡大へ

以下、本文/②第一次世界大戦と大衆社会/③経済危機と第二次世界大戦/④国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題

D グローバル化と私たち

①グローバル化への問い/ 20C 後-21C、グローバル化の総論 pp.172-173

*人・モノ・資本・情報の急速な移動/感染症の急速な拡大/冷戦がもたらした核兵器開発競争/環境問題の惹起

→人類は国民国家では対応不可能な地球規模の諸課題への対応を迫られている/共生社会確立への模索

以下、本文/②冷戦と世界経済/③世界秩序の変容と日本/④現代的な諸課題の形成と展望

(2) 歴史学の研究成果と「歴史総合」

「歴史総合」全体の特徴

a. 対外関係の重視

*他国との関係のなかで歴史が成り立っていることを理解

b. 比較史という方法

*複数の地域・国家で類似の仕組み・制度を比較/共通性・差異性の意味を確認

この背景には、1970・80 代以降の社会史の隆盛に後押しされる形で、1990 代以降、特に強調されるようになった国民国家の相対化という歴史学の成果

* 19C-20C 初に成立した国民国家を単位としてものごとを発想する誤り/国民国家の枠組みを前提とする発想は前近代では適用できない

→現代の国民国家単位で歴史を見るべきでない

*ここに国民意識を育成しようとする志向性と、国民国家論という歴史学の成果のせめぎ合いが存在

3. 「日本史探究」の構成

(1) 学習指導要領が提示する「日本史探究」と教科書の実際(第一学習社版)

A 原始・古代の日本と東アジア

①黎明期の日本列島と歴史的環境 pp.16-29

*このうち、日本列島の黎明期の本文 pp.18-25

②歴史資料と原始・古代の展望 pp.30-31 /①と併せて古代史全体を展望

→日本列島における国家形成以前の特徴/東アジアとの共通性/密接な自然環境との関係

③古代の国家・社会の展開と画期/以下、古代史の叙述

B 中世の日本と世界

①中世への転換と歴史的環境 pp.64-75

*このうち、古代・中世移行期の本文 pp.66-73

②歴史資料と中世の展望 pp.76-77 /①と併せて中世史全体を展望

→院政期が中世秩序形成のスタート/アジアのなかの中世日本/気候変動や戦争と隣り合わせの生活

③中世の国家・社会の展開と画期／以下、中世史の叙述

C 近世の日本と世界

①近世への転換と歴史的環境 pp.106-119

*このうち、中世・近世移行期の本文 pp.108-117

②歴史資料と近世の展望 pp.120-121 /①と併せて近世史全体を展望

→戦国期が近世秩序形成のスタート／複数の回路を通じて世界中がつながる一方で、日本列島では地域意識が目覚め始める

③近世の国家・社会の展開と画期／以下、近世史の叙述

D 近現代の日本と世界

①近代への転換と歴史的環境 pp.158-171

*このうち、近世・近代移行期の叙述 pp.162-169

②歴史資料と近代の展望 pp.172-173 /①と併せて近現代史全体を展望

→「内憂外患」の惹起が近代秩序形成のスタート／近代秩序の形成は内在的矛盾と外在的衝撃が起点

③近現代の地域・日本と世界の画期と構造／以下、近現代史の叙述

④現代の日本の課題と探究

(2)歴史学の研究成果と「日本史探究」

「日本史探究」全体の特徴

a. 複数の時間軸を想定する議論を背景に、緩やかな時代区分論へ

*ただし、前後の時代との差異を意識して時代の特徴を理解するべき

b. グローバルな視点を重視する議論を背景に、常に外国の動向を念頭に置く叙述

*ただし、内在的矛盾やマイノリティの存在とを組み合わせることで秩序の転換を理解するべき

おわりに—「歴史総合」・「日本史探究」の利点と課題

「歴史総合」・「日本史探究」・「世界史探究」の導入／近年の歴史学の研究成果を反映させようとしている

→歴史用語の削減とともに、資料や概念の積極的導入による歴史教育の実現が目標

*歴史学の成果を社会還元する手段としての歴史教育、という位置づけの点で望ましい

しかし、課題も存在

*問の設定とアクティブラーニング／どのような問(課題)を設定するか

→どの立場に立つかによって、問の質は変わる／学問的に適切な問ばかりとは限らない／何が学問的な問なのか、という問題も存在

*とりわけ、学習指導要領で求められている「時代を通貫する問」を立てることにはさらに困難がともなう

→歴史の知識を持っていればよいというものではない／歴史的思考力とは何か

*現在を絶対視しない視点を持つ思考力／歴史学とは変化を考える学問

【参考文献】

歴史学研究会編『「歴史総合」をつむぐ—新しい歴史実践へのいざない』(東京大学出版会、2022年)

歴史科学協議会編『深化する歴史学—史資料からよみとく新たな歴史像』(大月書店、2024年)

『日本史の現在』全6巻(山川出版社、2024年)

【付記】

・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。